

東京都立大学都市研究センター第4回公開講演会

## 江戸—東京：その連続性と不連続性

1991年12月2日

於 都民ホール

1. 開会あいさつ
2. 江戸の都市構造
3. 首都東京の成立  
——1870年代から1890年代まで——
4. 閉会あいさつ

石田 頼房\*  
吉原 健一郎\*\*  
石塚 裕道\*\*\*

### 1. 開会あいさつ

本日は東京都立大学都市研究センターの公開講演会にお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

私は都市研究センターの所長をしております石田でございます。

今日の公開講演会は、東京都立大学が行っております公開講座の一環として、都市研究センターがいろいろ企画をし、準備をしたものです。都市研究センターは都立大学の附置研究所で、都市問題・都市政策を広く研究するために1977年に設置され、現在まで十数年にわたって都市問題・都市政策を研究してきております。

さて、今日の公開講演会は「江戸—東京：その連続性と不連続性」というテーマで開催したいと思っています。

ご承知のように東京は最近ますます巨大化しまして、世界都市、あるいは世界の金融、経済、情報の中心として大きく発展しています。

また一方で東京は、一極集中問題と言われるような深刻な問題をも抱えています。数日前、東京都の都市計画局が「東京都市白書'91」という報告書を発表しました。それは東京の一極集中問題を取り上げて、その実態をニューヨーク、パリ、ロンドンなどと比較しながら、問題点を明らかにした白書です。もちろんこのような発展は、東京が明治以後日本の首都として、近代的な日本の政治、経済の中心として発展してきたということによるわけです。特に最近、日本の経済の非常に大きな発展を背景に、東京の巨大化があるわけです。

しかし歴史をふり返ってみますと、江戸は非常に大きな都市でありました。それは世界的に見ても非常に大きな都市であったわけです。封建時代でありながら、江戸は中央集権的な政治、経済の

\* 東京都立大学都市研究センター所長

\*\* 成城大学文芸学部

\*\*\* 元東京都立大学人文学部

中心として、120万、あるいはもっと多かったとも言われていますけれども、非常に大きな人口を抱え、文化、経済、あらゆる面で世界的に見ても非常に大きな都市として発展してきたのです。

そういう江戸が明治維新によって、近代的な日本の首都として確立し、発展し、その間二度の大きな災害を経ながら今日に至っているわけです。江戸時代の東京、江戸のいろいろな意味での影響が、明治以後の東京に色濃く残っている、その残り方については、学問的にもいろいろな議論があります。

今日このテーマに掲げましたような、江戸と東京のいろんな意味での“連続性”、あるいは“不連続性”ということについて、学者の間でもさまざまな議論があります。そこで「江戸と東京の間にある連続性と不連続性」に焦点を当てて、お二人の都市史の専門家からお話を聞こうというのが、今日の企画です。

はじめに今日の講師の先生を簡単にご紹介いたします。最初にお話をいただくのが、成城大学の文芸学部教授、吉原健一郎先生です。

吉原先生は東京都の公文書館の主任調査員を経て、成城大学の先生になられまして、現在は文芸学部の教授であります。吉原先生は日本の近世史、特に江戸の地政に関する研究をされておられますけれども、特に江戸の民衆生活史についていろいろなお研究、ご著書がございます。今日は江戸から東京へどういった生活がつながっているのか、どういう面ではそれが断絶していったのかというあたりを、「江戸から東京へ」という視点でお話しただけなのではないかと思えます。

2番目にお話しいただくのは石塚裕道先生です。石塚先生は私どもの大学の人文学部史学科の教

授でいらっしゃいます。1983年から4年間、都市研究センターの所長をお務めになりました。石塚先生は日本の近代史の研究者で、特に東京を中心とする都市史のご研究がご専門です。都市研究センターには都市史・都市計画史の研究グループがありまして、ここ何年間かこの研究グループの中心になっていただいています。私も専門としては都市計画史を少し勉強しているのですけれども、私をはじめ、多くの都市研究者の中心になってご指導いただいている先生です。

石塚先生は日本の資本主義の発達についてのいろいろなお研究がありまして、従来ややもすると日本の資本主義の発達が農村を中心に語られているのに対して、もっと都市を中心に日本の資本主義の発達を見るべきであるというお考えから、横浜、川崎などの京浜工業地帯の形成史などについてもご研究されています。今日はそういう意味で、明治以降のご研究をなさっている立場から、江戸から明治に何が受け継がれていって、どういう点でそれが変わってきたのかという、むしろ明治に立脚点をおいて江戸を見るというようなお立場でお話がいただけるのではないかと思います。

最初に吉原先生に約1時間お話いただきまして、若干休憩を挟んで石塚先生のお話を聞いていただくという予定で進めたいと思います。

今日のお話は、学問的にも非常に重要な問題について、なるべくわかりやすくお話しいただきたいという、やや無理な注文を両先生にお願いしておりますけれども、4時過ぎまでのこの時間、ぜひご清聴いただくようお願いいたします。

それではこれをもって開会のあいさつとさせていただきます。

## 2. 江戸の都市構造

吉原 健一郎

ただいまご紹介いただきました吉原です。

このテーマを最初にお伺いしましたときに、お引き受けしていいものかどうか悩みました。私も

東京生まれの東京育ちですけれども、果たして現在私たちが住んでいる東京という地域を肯定的に見るのか、あるいは否定的に見るのか、それは両

方あるわけですが、その考え方によって、歴史の見方、振り返り方というものも違ってきましょうし、それから、これからの東京をどうすべきか、どうあるべきなのかということを考える場合の立場も違ってこようと思うわけです。

そういうことから考えますと、研究とか学問とかいうものは、常に現状を肯定的に見るだけではなく、やはり批判的に見るということにならざるを得ません。平たく言いますと、東京の便利さ、非常にさまざまな機能が集中している東京のいい面、同時に東京のもっているさまざまな弊害、問題点というものがあるわけで、その住みにくさ、そうした問題に目を向けて、そうでない東京をどうつくり上げるのかという視点が必要になるかと思えます。

いま司会の先生からもお話がありましたように、現在の東京の最も大きな問題点は一極集中ということであろうと思えますが、この一極集中の中で何が失われていったのかということを考えてみますと、これはさまざまな問題があるわけです。その問題をどう解消していくか、あるいは解決していくかという課題が都政、あるいは区政、市政の問題であるわけです。そのことをお話するだけでも大変時間がかかるのではしょっていきますけれども、東京の一極集中がもたらした問題で、現在もなおかつ大きな問題となっているのは三つあるかと思えます。

一つは職住分離の問題です。地上げに伴いまして、東京の中心の区部はみな人口が減少しています。学校もたくさん廃校になっています。こういう問題はどうか。その結果生み出された周辺の県への矛盾のしわよせがあるわけです。ついこの間の新聞にもありましたように、埼玉とか千葉は非常に住みにくい嫌なところであると。こういうことは埼玉県や千葉県が悪いわけではありませんで、東京の問題がそこへ集中しているからです。それが通勤地獄というような結果をもたらしているわけです。通勤に費やすエネルギー、その無駄な時間というものがあるかどうかが私たちの生活を圧迫しているかというふうな問題があるかと思えます。

あるいはゴミの問題。私が住んでいる江東区は常にごみを引き受けて、そのごみの処理をめぐっていま区の議員さんたちは清掃車をストップしようという運動をしております。

あるいは大気汚染の問題、こういう三つの問題があります。そういうものが集中しているわけですが、果たしてこれが江戸以来の連続性なのか不連続性なのか、こういうことが問題になってこようかと思えます。

そこでいよいよ本題に入りますが、こうした問題を踏まえながら、「江戸・東京——連続性と不連続性」の問題を考えてみたいと思えます。

## I. 総城下町江戸の特殊性

### 幕藩体制の首都江戸

レジュメの最初に「総城下町江戸の特殊性」ということを出しておきましたけれども、この中で私が問題にしたかったことは、まず江戸という都市をどう見るのかということです。そのことを押さえた上で江戸・東京の問題に入っていきたいと思っています。

いうまでもなく江戸という都市は、江戸幕府の首都であります。そういう首都性、首都であるということは現在でも連続性をもっております。しかし江戸の首都性というものはどういう特色があるのかということ、まず簡単に整理してみたいと思えます。

江戸がなぜ特殊なのか、世界の中世の都市の中で、どういう点に特殊性があるのかということを見てみますと、まず第一に江戸幕府あるいは江戸時代というものもっている特殊性から考えてみなければならぬと思えます。江戸幕府というのは、世界史上初めてと申しますか、一つというか、「石高制による国家」という特色をもっている国の首都です。これはお話するときりがありませんけれども、お米を中心とする、つまり米の基準である「石高」によって規定された社会の首都です。

かいつまんでお話ししますと、農村における土地の基準から始まって、大名や旗本の格というもの

まで、何万石の大名、加賀の前田様は百万石であるというようなことで、すべて石高で規定しています。歴史上にそうした社会はほかにはないわけです。そういう米生産、米の基準に基づく国家の中で、その生産力の高まりを反映した形で江戸という首都が誕生したわけです。その結果、先ほどもお話がありましたように、非常に中央集権制の濃い一国の首都が生まれたわけです。その政治的な性格は、これまた他のヨーロッパを含めた中世都市の中では珍しい形態をもっていると思います。

これはよくご承知のことと思いますけれども、大名の妻子を江戸に住ませることによって、全国を管理していく体制をつくり、またその結果、日本の統治というものは、江戸に住んでいる大名が国元へ出かけていくことによって、「参勤交代制度」という制度を生み出したわけです。一年ごとに江戸と国元を往復するわけです。したがって大名たちは江戸で生まれて江戸で育って、そして管理するときだけ1年間地方の国元へ戻る、こういう体制です。

よく江戸っ子論というのがありますがけれども、江戸っ子の典型は何だろうと言いますと大名だと私は思っています。初代の大名は地方出身者ですがけれども、後の殿様はみんな江戸生まれです。そういう特殊な都市の中で全国政治というものが行われていくという面をもっております。

### 三都論

次に「三都論」というものをなぜ挙げたかと申しますと、これは一極集中のあり方が今とは非常に違うという問題です。先ほど述べた江戸の首都性は政治的な、政治都市としての特色であるとするれば、三都論から出てくる江戸の特殊性は、経済的な問題を中心に考えて出てくる特殊性であろうと思います。

三都というのは申すまでもなく江戸・京都・大阪という三つの都市をあらわしています。江戸という都市は、先ほど言いました政治都市であるという特色の中から、その消費生活を維持するために設定された消費都市という性格をもっているわ

けです。消費をどういうふうに円滑に行うかということをも前提にした都市です。そうしますと、そうした消費すべき物資はどこから運んできたかと申しますと、これは京都や大阪から運んでくるわけです。もちろん京都は天皇が居住しておりましたけれども、それ以上に手工業都市という側面をもっていました。さまざまな高級品、衣類とか武士が必要とするようなさまざまな高級品を生みだす手工業都市です。

さらに大阪は、手工業都市の性格も持っていますが、江戸に向けての物資を送り出す商業都市でもあります。17世紀ぐらになりますと、廻船を使って大量の物資を船で江戸に運んだ、そういう商業都市です。本来商業都市の機能は京都にあったのですけれども、大阪が大阪の陣によって豊臣氏が滅びると同時に、港湾機能を使って江戸に商品を運ぶ都市というふうに発展していったわけです。ですからそういう意味では京都・大阪という二つの都市、あるいはその周辺地域の生産物、物資というものが前提にあって、江戸という消費都市が成り立っているという意味で、この三都という問題を抜きにして江戸は語れないわけです。そういう意味では一極集中ということは当たらないわけです。経済的な面からいうと一極集中ではないということです。そういう点をここでまず押さえておきたいと思います。

ですからその結果、関西と江戸との関係から言いますと、例えば物流システムをどう開拓するか。先ほど廻船の話をしましたけれども、物流システムの開発、あるいはそれに伴って、江戸で販売した物のお金が関西で支払われる、関西の大名の蔵屋敷などで支払われるという意味での為替システム、為替制度なども非常に発展して、ある意味ではヨーロッパの都市よりも早く、充実した為替制度ができたのです。あるいは通信システム、江戸からの情報の発信、あるいは江戸で商売をする場合の商品の需要・供給関係の情報などをどんどん関西に送りますし、関西の方ではそれを受けとめて、江戸を見ながら商売をするというような飛脚制度システムなども非常に発達していくわけです。

ですからそういう意味で、現在私どもが考えている一極集中というところから見ると、相当違っているという点が注目されるわけです。

人口的な面から見ましても、当時の日本の人口が仮に3000万人と考えますと、江戸の人口は約100万人ですから、1/30の集中度です。ところが現在は首都圏を入れますと全国の1/3が集中しているわけです。東京は一千数百万ですけれども、周辺を合わせますと3000万という人口の、いわばベットタウンも含めた首都性をもっているわけです。ですからそこに都市問題のありようも相当違うのではないかと思っています。

### 平和都市江戸

それから次にちょっと耳慣れないことでしょうが、レジュメに「平和都市江戸」という表現をしておきました。これは江戸が封建社会の都市でありながら、必ずしも封建制度の枠組みの中で規制しきれないようなさまざまな都市の問題を生んでいるわけです。それはなぜ起こったのかというと、江戸という都市がさまざまな身分、さまざまな階層といいますか、そういう人たちが寄せ集まった雑居都市である。その雑居性の中から生まれてくるさまざまな人間関係、社会のあり方というものが出てきたわけです。封建社会はこうだなどという基準から見ると、どうも説明できないようなさまざまな現象が起っています。

例えば遊びという面から言いましても、これはむしろ現在の若い人たちに共通するかもしれませんが、非常に遊びが日常化している。もちろん労働はしますけれども、農村におけるような決まった遊び、あるいは年中行事を行うということではなくて、毎日がいわば遊び、あるいは文化の空間として設定されています。

神田の名主で齊藤月岑という人がいましたけれども、その名主さんの記録を見ますと、仕事に出かけてその帰りに必ずどこかの神社仏閣にお参りに行ったり、あるいはお開帳といって、地方からもってきた仏様、神様などを拝みに行き遊んで帰ってくる。そして上野の蓮玉庵というそばやで一杯飲んでそばを食べて帰るというようなことが

連日のようになされていた。そういう日常的な中に、さまざまな遊びが取り入れられているという社会が生み出されてきました。

こんなことを言うと批判される方があるかもしれませんが、たぶん封建社会といっても、日本の封建社会の中でも一種の開放区みたいな性格もあったわけです。昔は江戸の町は警察によってがんにがらめに縛られているというような、徳川時代は警察国家の時代だというような議論もありましたけれども、それは表向きで、裏では括弧づきでありますけれども、自由な空間というものが生まれていたのではないだろうか。

それはなぜかといいますと、平和が続いたということですから。戦争がなかった。そうした中で人々は単なる衣食住の生活だけではなくて、文化的な生活をしようという意欲にあふれています。金持ちの商人、あるいは大名をはじめとして、長屋の人々にまでそうした文化意識、文化行動というものが生まれてきたというふうに思います。

## II. 江戸学と江戸東京学

こうしたさまざまな江戸の性格がどういうふうな明治以降も受け継がれていったのかということが次の課題になりますけれども、その前に最近提唱されてきました江戸学と江戸・東京学というのが、一体どういう経過で生まれてきたかという点を説明しておきたいと思います。江戸・東京の連続・不連続の問題と結びついて出てきているからです。

### 西山氏の江戸学

まず第1に、西山松之助氏の江戸学の提唱について若干考えてみたいと思います。参考文献は下に挙げておきましたけれども、『江戸学事典』の中の「江戸学総説」というところにそのポイントが出ております。

西山氏は江戸という都市の特色を男性都市、火災都市、それから強制移転の町というふうに規定しています。ですから先ほど私が申しました政治都市としてどうなのか、経済都市としてどうなの

かというところは、あまり強調されておられません。むしろ江戸という都市を文化史的に見た特色、あるいは都市構造の面から見た特色というものを、ズバリと指摘したものです。男中心の、つまり女性が非常に少なかった都市、そこから生まれるさまざまな都市の特色、例えば遊廓の問題とか、あるいは歌舞伎においても男性が女性を演ずるといような女形芸が進んでくる、そうしたところまで行くと思いますが、そういう男性都市としての特色があった。

それから火災都市としての特色、これは私などは火災だけではなくて災害一般、洪水なども入れなくてはならないと思いますけれども、一言言うならば火災都市という特色があった。これも非常に大きな問題です。火災を前提として成立している都市というのは、たぶん江戸がその最たるものです。火災で焼けることを前提として成立している。その火災によって消滅したたくさんの物資を、全国から補充するというシステムができています。都市という点でも非常に珍しい都市だと思えます。

それから強制移転の町です。これはちょっと説明が難しいのですが、都市の拡大のためあるいは都市施設をつくるために、幕府が相当強制移転を命じております。もちろん移転した場合の補償というものはあるわけですが、強制移転をさせているという点、それからそれは町人の町だけではなくて、武家屋敷その他も強制的に移転させられるという特色をもっています。

そうした三つの点を強調しながら、先ほどお話ししましたような、都市住民としての行動が文化と結びついていく傾向、これを西山氏は主張しているわけです。つまり非常に長い間平和が続いた都市であるだけに、さまざまな文化活動が生まれてくる。その文化活動の最も中心になったものは、西山氏に言わせると、行動文化という形で、一般の人々があちらこちらを歩き回ることによって生み出されたもの、あるいはそうした行動を前提とした文化活動というものが非常に活発であった。これは現代の私どもとある程度共通する文化行動の側面をあらわしていると思えます。

ただ、ここでさらに西山氏が言っているのは、江戸・東京の連続・非連続の問題を考えなくてはいけないということです。「不連続」ではなくて「非連続」という言い方をしまして、江戸のさまざまな文化的な蓄積、文化活動というものが、明治以降日本が近代化される中で、断絶したのではないか、したがってそうした断絶というものをまた克服することが、我々の課題ではないかということが西山氏の一番言いたかったことではないかと思えます。

近代社会というものは工業化を急ぎ、産業中心の社会をつくるために、失ったものが多いのではないか、もう一度江戸に戻り、江戸の文化というものを考えることによって、近代というものを乗り越える力というものが生み出されるのではないかというのが、西山氏の主張であろうかと思えます。

#### 小木氏の江戸東京学

次に江戸・東京に着目した研究者として小木新造氏がいます。『江戸東京学事典』の序説というものを書いています。さらに最近筑摩書房から『江戸東京学事始め』という本を書いています。今年になって出版された本です。小木氏のこの二つの書かれたものを読みながら、いくつか整理してみましょう。大きく分けると二つのことを小木さんは主張されているようです。

一つは江戸から東京へかけての、また現在の東京に至る間の都市空間の連続性という問題であろうと思えます。江戸という都市空間が現在まで連続しているということ、言いかえすと、基本的な都市計画的なものは、現在もそのまま連続している、そういう都市的特性をもっているということです。これはひっくり返して言いますと、江戸という都市の基盤がそのままいまだに大きな変更がなくつながっているということです。非常に大規模な都市計画を行い、それによって東京の都市のスタイルを変えたということはないわけです。計画としては明治以降あったわけですが、実際には、否定的なことを言うようですが、何も行われなかったということになります。

これはやや言いすぎになるかもしれませんが、なぜそういう東京の特色があるかという、東京の住民にとって、東京とは必ずしも一生そこに住むべき場所として考えられていなかった、そういう人たちが多かった、あるいはそういう人たちによって再生産された都市であったということでありまして、小木氏に言わせると、東京という都市は主体性がない、東京の住民というのは主体性がなかったということです。そういう点を指摘しております。

そして小木さんは、一極集中型の都市ということの問題にされていまして、政治・社会・情報機能が集中している東京というものを考える場合に、その連続していない面よりも、連続している面をいろいろ問題別に整理して考えてみることによって、見えてくることがあるのではないかということを中心として主張しております。

なぜ小木氏が連続性というところに重点をおいたかと言いますと、小木氏の研究の主体が、1868年の明治維新の東京から、大体明治20年代ぐらいまでの東京が専門であったために、その時期を見ていきますと、江戸との連続性が非常に見られるということなのです。小木さんは「東京（トウケイ）時代」といって、「京」という字の真ん中に横棒を入れて「トウケイ」と読ませているわけです。確かに明治の初年には東京のことを「トウケイ」と読んだり「トウキョウ」と読んだり、混用しておりますけれども、小木さんはわざわざ真ん中に横棒を入れ「トウケイ」と読ませています。しかし、実際にはこの字と読み方との関係はどれも連動していないようです。横棒が入っているから「トウケイ」と読むとか読まないのかということはありません。またその時代に「トウケイ」という言葉が一般的であったとも言えないのです。ただ小木氏はその時期を強調したいがために、わざわざ「東京（トウケイ）時代」という言い方をしているわけです。

明治の初めのころの東京の首都性ということを見ますと、そこにはやはり江戸以来の中央都市としての都市的な性格とか、あるいは消費都市としての性格とか、情報都市としての性格が連続して

残っているということが言えます。

それから文化という面から見ましても、ある意味では江戸時代に形成されてきた都市のサロン文化と言うものの継続も見られます。また日常生活という面から見ても、庶民の衣食住の問題は江戸の衣食住の問題を引っ張ってきています。つまり近代国家が成立して、まさに文明開花というもの定着していくのは、明治の末から大正・昭和という時代の中で変わっていくわけで、それ以前の明治20年代ぐらいまでは、江戸は連続しているのだということをお小木氏は言いたかったのだと思います。確かに都市の外観、「景観」という言葉を使いますと、大正の震災ぐらいまでは江戸的な景観をもった都市であったということは言えようかと思えます。これが第1点です。

それから第2点は、明治政府はそうした江戸のさまざまな伝統、あるいは文化をできるだけ消し去ろうとした。近代国家のために江戸を否定することによって東京をつくり上げようとした、近代都市、近代の首都として東京をつくり上げようとしたということを指摘されておりますが、しかしながらそれは結局、全体として見れば失敗に終わったというのが小木氏の論理です。

もちろん部分的に銀座の煉瓦街であるとか、そうした都市計画上でのいくつかの都市改造計画があったわけですが、基本的にはそれは成功しなかったわけです。それはなぜか。石塚先生が後でお話になるかもしれませんが、東京の住民というものを考えた上での都市計画であったかどうか疑問なのです。例えば下水道完備なども、ようやく今ごろになってアメリカから言われてやっているというように、都市の基盤整備という問題が、住民生活をどう保障していくか、住民生活をどう発展させていくかという問題からやられたとは思えないのです。その結果結局のところは江戸の遺産を相続し、江戸の上に乗っかって都市づくりをしなければならないという結果を生み出したのだというふうに述べているわけです。

ですからかいつまんで言えば、西山氏が言い始めた江戸学というものは、近代を否定して、近代で失われたものを取り戻すための江戸学というも

のであり、小木氏の江戸東京学は、やはり近代の中で変えようとして変わらなかった江戸の遺産をどう考えるかという問題意識をもっていたのだというふうに整理できようかと思えます。

それではそういう二人の考え方をそのまま私どもは承認すればいいのかというと、事はそう簡単ではないのではないのかというのが私の考えです。

ではどういう考えなのだと言われると困るのですが、結論の部分のところで少しその点は述べてみたいと思います。

### Ⅲ. 江戸と東京

#### 首都としての江戸・東京

さてそこで結論に至る過程として、「江戸と東京」について、どういうふうに連続・不連続を考えたらいいかという問題に移りたいと思います。ただこれはさまざまな次元の問題、しかもそれに伴う具体的ないろいろな事実というものがありますので、それをどういうふうに整理するのか、どう考えるのかということは、むしろこれからの江戸・東京に興味をもっている方々に課せられた課題であろうと思います。たくさんの人にこの連続・不連続に興味をもっていて、そしていろいろな側面からアプローチしていただきたいと思えます。ここではまず江戸東京の都市の性格について考えてみましょう。その最も基本的なことは、江戸・東京の首都性ということです。首都というものをどういうふうに見るのか。しかもアジアのはずれの島国にできたこうした大都市、Ⅰのところ「総城下町」という言い方をしていますが、「石高制」という特殊な国家形態の中で生まれた「総城下町」——全国の城下町という意味で使っているわけですが、そういう都市の現在までの首都性がどう継続してきているのかということをも第1に考えてみたいと思います。

#### 地域構造——大名邸と官公庁

この問題は、まずわかりやすく言いますと、まずハード的に考えてみる必要があると思えます。

そうしますと、小木さんも触れていますけれども、地域構造の面から見て、その首都性がどういうふうに継続されていたか、またどういうふうに発揮されていたかということになろうかと思えます。

「大名屋敷と官公庁」という言葉を挙げておきましたけれども、近代都市が成立する上で、つまり明治維新以後、東京は首都として継続するのに非常に便利な都市であった。ほかに都市をつくる必要もないような地域構造をもっていたということが第1です。

やはり明治政府ですから、京都に首都を置いた方がいいという意見が非常に強かったわけですが、たぶんそれは事実問題として京都に中心都市をもっていくことは不可能であったでしょう。東京を中心にやらざるを得なかったわけです。その象徴がこの「大名屋敷と官公庁」という言葉にあらわされているわけです。この江戸の中心部にありましたたくさんの大名屋敷を全部没収して、そこに近代国家に必要なさまざまな施設をつくり上げていった。官公庁だけではありません、さまざまな軍事施設、演習場とか代々木の練兵場とか、そういうものをつくっていくわけです。ですから地域構造の面から見ても、江戸は、ハードの面からいえば東京に連続していったという面があります。

#### 政治機構——吏僚制

それから政治機構の面からいっても連続していったと言えると思えます。政治機構というのは、ソフトの面ですけれども。

単なる江戸という都市の地域制、地域構造の面だけではなくて、江戸以来培ってきました二百数十年の間で生まれた「吏僚制度」——「官僚制度」という言葉は近代の言葉のようなのでつかいませんけれども——つまり政治支配機構の一定の部分が、明治にそのまま引き継がれていっているということです。教科書にそんなことは書いていない、教科書では太政官制というもので、古来の律令制度に習ったような官職がいっぱいできているじゃないか、そこには不連続性の方が強いのではないかというふうにいる方がおられると思えますが、



明治政府の機構を見ますと、相当部分の江戸の支配機構が移されていった。トップの方は薩長土肥の人々に占められますけれども、具体的な支配機構の中身、つまり役人さんたちを見ますと、意外と幕府に勤めていました人々が多いわけです。一番いい例は市政裁判所というものができまして、江戸の都市の支配・管理を行うわけですが、その役人のほとんどは江戸の町奉行所の役人が採用されて勤めております。ですからそういう政治的な機構をつくる上でも、江戸という都市の延長線上である東京がふさわしいというふうに判断されたのだと思います。こういう面ではハードな面を中心として、江戸・東京は大いに連続していると見ていいかと思えます。

#### 都市住民——教育・文化

しかし問題なのはその次に述べたい「都市の住民」はどうだったのか、これが私が一番興味のある関心のあるところなんです。先ほどお話したように、100万都市、120万あるいはそれ以上と言われる江戸がどう変わったかという問題について二、三触れてみたいと思います。これはたぶん連続と不連続が、織物のように縦糸・横糸でからみあっている問題だと思えますけれども、いわゆる小木氏のいう「東京（トウケイ）時代」の江戸の庶民たちの生活、あるいは庶民はどういうことだったのかと言いますと、一口に言ってしまうと、全人口が激減します。120万都市からその半分ぐらいになってしまいます。そしてその中心は江戸の庶民です。つまりほとんど江戸の町人たちによって、東京はできているという事実があるわけです。そういう人たちはどういう生活をしていたのかというと、私は江戸時代以下の生活を強制されたと思います。大名がおり旗本がおり、つまり武士階級がいて町人がいて成り立っていた江戸というものが否定されて、江戸以下の都市生活というものが生み出されていった。これが連続しているけれども不連続であるということの実態だと思います。住民は連続していましたが、生活その他は不連続であるということが言えると思います。

しかし、先ほど言いましたように、縦糸・横糸

が複雑にからみ合っていますので、それを連続させようとして、その生活を維持させようとした住民の動きというものがあったわけで、それは例えば教育や文化の面で強調されていくべきものであったと思います。

時間の関係もありますから、教育の問題にちょっと触れておきますが、これは小木氏も主張されていることですが、それ以前から私も気がついていたわけですが、東京において、私立小学校というものが非常に長く続いていた、これは全国でも東京だけの問題です。明治政府は明治5年に学制をつくります。そして全国に不学のものがないようにというので公立小学校をつくらせまうけれども、東京だけは公立小学校がうまくできないのです。江戸以来の住民たちは、いわゆる寺小屋、私塾というものを大事にしまして、公立小学校はいらないという運動をするわけです。これによって、部分的には少しは公立ができますけれども、結局大問題となります。当時の大久保一翁という東京府知事がいます。この人は旗本ですが、勝海舟などと親しくて、例の江戸城受け取りのときに、西郷隆盛と勝海舟が会談しますが、そのお膳立てをした人です。この大久保一翁を明治政府は江戸の住民対策のために府知事に任用して、そして東京府民を慰撫するというか、いわば頭をなでるような政策をとるわけです。しかし、大久保一翁は公立小学校をつくることを推進しません。東京だけが私立小学校で通るわけです。当時の私立小学校というのは私塾の延長ですから、汚いとか環境が悪いなどとさかんに批判されますけれども、それを通していった。

これは一つの例ですが、そういうふうに明治政府は自分の足下にある江戸以来のあるいは江戸以下の生活をしている庶民に対して、十分なコントロールができないわけです。あるいはそういう住民を、例えば近代国家の都市として恥ずかしいというので、移動させたり、東京の外へ出したりという政策をとっていくわけです。

#### 都市住民——伝統技術

次に伝統技術という面ですけれども、これはや

やはり連続性と不連続性の面から見ますと、職人層というものが、江戸の中で成り立っていた職というものが失われつつあるという状況が見られます。将軍・大名・旗本の時代に生計を維持していた職人層の仕事というものが失われてしまう。その中で職人たちはどうするかと言いますと、西洋的なものの中に自分の技術というものがどう取り入れられるのかというやり方で対応していくわけです。その場合に強調されるべきことは、そうした職人の技術というものが、江戸の社会の中で——これは江戸だけではなく、全国的に見てもそうですが、特に江戸の社会の中で存在したために、西洋の文明あるいは西洋の技術というものを取り込んで、それを発展させる基礎になっていったということが言えようかと思えます。

江戸時代のからくりの技術、いろんな機械技術、そうしたものが基礎にあって、明治の西洋技術の継ぎ木といいますか、移転が成功したのだというようなこと、あるいは現在のバイオテクノロジーとか電子関係のさまざまな生活も、さかのぼればその辺まで行くのではないかといわれるような日本人の技術的な特性というものは、すでに江戸時代から基盤があったのではないかという言われ方もしているわけです。これは一つの例です。

### 都市住民——住民生活

それから住民生活の面から見るとどうなのかということになりますと、さっきから言っていますように、江戸であって江戸でない東京といったらいいでしょうか、江戸以下の生活を強いられてきた東京の住民は、非常にさまざまな貧困化をもたらされるわけです。これもお話しすればきりがないのですけれども、例えば樋口一葉の小説「にぎりえ」とか「たけくらべ」、樋口一葉の生活自身もそうかもしれません。一方では武士の生活が破綻し、また江戸以来の伝統的生活が維持できなくなるという社会が明治初年には続くわけです。

さてそうしたいろいろな連続性・不連続性を見てもまいりますと、やはり一番基本的なものは、同じ首都性という江戸・東京でありながら、明治以降の近代化の過程の中で、明治政府はハード面

の基盤としての地域構造は受け継ぎながら、やはり基本的な都市づくりとしては、住民不在の都市計画を行おうとしてきたということです。これは単純にいい悪いという問題ではありません。逆に言えば近代国家をつくるために、そうせざるを得なかったのではないかという同情論も成り立つと思えますけれども、住民不在という意味は、先ほど言ったように、都市の居住者を前提にした、あるいは都市の居住者のための都市基盤整備、都市づくりというものは後回しにされて、そして一目散に近代国家の道を進んできたわけです。小木氏流に言えば、江戸の遺産の上に乗っかって、野放図にといたら極端ですけれども、都市計画上は、計画を立てたけれども実現できないといったような問題も含めて進められてきたわけです。そのつげが現在に至っているわけです。

ですから連続・不連続の視点から見る場合に、やはり江戸以来の住民の観点から——これを私は地方史的視点からと言っていますけれども、江戸という一つの地方・地域、その中にもいろいろな特色があるわけですけれども、そういうものをひっくくめて江戸の地方史的視点、人によっては矛盾するじゃないか、首都性を言いながらなげ地方史的視点をというのかというご批判があるかと思えますけれども、地方史的な視点から見た場合に、江戸の住民、東京の住民に焦点を当てた都市の歴史を考えていくという場合の連続・不連続というものを、最も基本に据えて歴史を見る必要があるのではないかというわけです。

現在では江戸の遺産と言われたような、目に見える江戸の景観、江戸以来の景観、あるいは東京の町の特色というものが、ついにこの高度成長以来あるいは最近のバブル現象以来激しくなって、たぶんこのままいくと、ハード面でも不連続の都市にこれからなっていくのではないかという危険性が多分にあるわけです。谷間のあるところに高層ビルが建って、名前は谷町でも谷ではなくなったりという例がありますけれども、川はなくなる、運河はなくなるというふうなことが続いていけば、たぶんここでまさに東京の中での不連続が生じてくるわけです。

私たちが21世紀の東京はどうあるべきかということ考えたときに、その歴史を区分してみると「江戸」それから「東京（トウケイ）時代」、それから明治以降の近代国家としての「東京」、それから戦後のオリンピック以降に分けてもいいでしょう。あるいは最近のバブル以降とでもいいでしょう、そういういくつかのエポックの中で何が連続しているのかしていないのかということ、今後とも考えていきたいと思っています。その場合に

私の視点は、あくまでもそこに住んでいる人々の生活の視点からどうだったのか、どこが連続していたのかいなかったのかということを考えるべきだと思う次第です。

後半は少し駆け足で進んでしまいましたけれども、一応将来のことを考えていく上で何らかのご参考になれば幸いです。

どうもご清聴ありがとうございました。

### 3. 首都東京の成立

石 塚 裕 道

#### ——1870年代から1890年代まで——

はじめに 今日では人口1000万を超える世界でも有数の巨大都市の東京について考えることとなりますが、果たして人口が世界第1位かどうかははっきりわからない、と申しますのは、中国の上海あたりの方が人口が若干多いかもしれません。

それはともかく、そうした世界でも有数の大都市である首都東京について、考えていきますが、ここでは特に江戸と東京との「連続性と不連続性」ということを問題にしたいと思います。

**首都東京の都市史の3区分** その問題を考えていくうえで、まず対象とする時期を限った方がよいと思います。そこでこの120年間の東京の歴史をおおまかに見た場合、私はおよそ3つの時期に分けて考えます。つまり今から約120年前の戊辰戦争—これは周知のように薩摩藩や長州藩を中心とした討幕派による倒幕戦争—であり、いわば全国的な内乱のかたちをとった大規模な戦いでした。その戊辰戦争を境いに、以後1923（大正12）年の関東大震災までを第1期とします。そして大震災から1945（昭和20）年の第二次世界大戦の末期までの東京を第2期と考えたい。そしてそれ以後、いわば戦後から現在までの東京を第3期と見てよいのではないかと考えています。

こう考えた場合、今日のテーマの「連続性と不連続性」という問題に迫るには、第1期を中心に

考えることが適当ではないかと思っています。現在までの120年間に、首都東京は、そうした内乱と災害と戦争という三つの大きな画期を含みながら、発展と崩壊そして成長を繰り返して、一極集中のひずみをも抱えている現代の東京に行きついた、そういう経過をたどっているのではないか、と思います。

そこで明治維新期の戊辰内乱から関東大震災まで、この時期はおよそ半世紀にわたりますが、この時期をどう考えたら、今日の「連続性と不連続性」の課題に迫れるかということが、一つの焦点になってくるかと思っています。

まず、首都東京にどのように迫ったらよいか、そのアプローチの方法を考える、つまりそのための道具立てを考えなければならない。相手は怪物のような大きな分析の対象ですから、一人あるいは数人で立ち向かおうとしても、その全体に迫ることは容易ではないわけで、そこで対象に接近するための切り口のようなものを、どうしても考えておく必要があります。

首都東京の都市形成史を考えるために、つまりそれに近づく姿勢として、以下の二つの視角を設定したいと思います。

**都市問題史と都市間分業論** まず第1に、江戸から東京への移行をその都市文化の考察も含めて、その全体像に迫る方法の開発が必要と申しましたが、その点について、東京に住む人びとの生

活と、それが直面してきたさまざまな社会問題、あるいは都市問題などを考えることによって、首都東京の歴史像に迫る方法はないか、つまりそういう角度から東京の歴史のイメージをつくれなかつたかということ、これまで考えてきました。

もう少し具体的に申しますと、都市問題と言いましても、ここでは歴史を扱うわけですから、都市問題の歴史あるいは都市問題史ということが課題になります。都市問題とは、今でも話題になりますように、土地問題や住宅問題から交通問題、あるいは公害その他、都市を舞台にしたさまざまな社会問題がそれに含まれます。しかし、そうはいっても、現在の都市問題と明治期の東京の都市問題とは、内容が違うのは当然です。例えば、現在の光化学スモッグなどは明治の東京では考えられなかったのです。また明治の東京で大問題になっていたコレラとか肺結核という伝染病の大流行などは、今ではもうほとんど姿を消しています。そのように都市問題といっても、それぞれの時代に各時代を通じて、そこに住む人びとに与えた影響はまったく違います。

そこで、明治期の東京に迫る場合、都市問題についていろいろ見てきたのですが、一つはまず、江戸以来の貧困の問題に焦点を当てた場合、そこに都市のスラムの問題、例えば都市の下層とか、そういう人びとの姿がまず浮かびあがってきます。そういう貧困の問題を抱え込んだ都市のスラムという社会問題があり、それからもう一つは、そういうスラムを基盤に、深刻な問題として、そのころの人びとに襲いかかってきた都市の生活環境あるいは環境汚染の問題があったと思います。その中心は伝染病でした。過密なまでに人口が集積する都市では、いろいろな点で不潔・不衛生な条件があり、そこでの伝染病の発生と流行が人びとの生活に脅威を与え、あるいは破壊に追い込むということを多くの史料が示しています。

そういうわけで、都市での社会問題と、環境あるいは環境汚染問題は複雑で多様に重なり合い、あるいは結びついて、都市の基底の部分をして、その都市のあり方を規定しています。そしてそうした都市の貧困の問題に焦点を当てた場合、「脱亜

入欧」をめざす明治国家が、近代化の過程で切り捨てた都市の住民、とくに下層の人びとの暮らしに、民衆生活史として焦点を当てられないか。歴史にはいろいろな迫り方がありますが、そのなかで、私は都市の底層、底辺の民衆生活からその仕組みの頂点を見あげる、そういう方法を組み立てられないかということです。

それからもう一つは、首都東京の国際化をめぐって。周知のように、幕末期に江戸を含めて日本全体が、ペリーの黒船の来航によって開国をよぎなくされますが、それ以降、1世紀を超える江戸そして東京の歴史が焦点の一つになってきます。そうした動きを他の諸都市との連携で見る必要があります。とくに幕末の開港以後、江戸は当時の生糸の最大輸出港であった横浜と密接な関係を結びます。そういう江戸と横浜あるいは東京と横浜との関係は、時には生糸輸出の分けまえをめぐって対立する側面もあったのですが、ある場合には、一方が政治都市で、他方が商業都市という分業関係を生み出しながら、明治国家の仕組みのなかにビルトインされていった側面があります。そうした江戸と東京との関係を考える必要があります。

それからまた、関西でも大阪と神戸の関係が同じようなかたちで出てきます。幕末に神戸も開港場になりますが、その場合、大阪と神戸のように大きな都市間の問題もあり、また明治維新以降は東京と大阪の比重が変わります。そして横浜や神戸などの開港場も含めて、日本の内部で分業関係が形成され、それを視野に含めなければ、首都東京の動き自体もよくわからないのではないかと考えています。

それからもう一つ、明治維新後、明治国家は幕末の不平等条約の改正に全力を注ぎます。欧米列強なみに当時の先進国の仲間入りをしたいということで、旧幕府が外国と結んだ日本に不利な不平等条約を改正するために一国を挙げて取り組むのですが、その一環として、政府は首都東京の街づくりに着手します。東京を先進国なみの首都につくりかえよう、それには当時の世界を支配していた大英帝国の首都ロンドン、あるいは「花の都」

ともいわれたフランスのパリ、それらをモデルに東京を改造しよう、つまりヨーロッパ対東アジアの緊張関係のなかで東京の都市史を考えなければならぬ、いわば国際的な条件に配慮する必要があると思います。この点が、鎖国時代の江戸と比べて、かなり面倒であろうと私は考えます。このように、いくつかの道具立てを用意しませんが、首都東京の実態が見えてこないのではないかと。そして私は、与えられたテーマ「江戸・東京、その連続性と不連続性」の意味を、一応次のように理解します。これは「江戸と東京」あるいは「江戸から東京へ」という言いかたにもなります。「江戸から東京へ」という表現では昔から面白い本も刊行されていますし、「連続性」という側面に注目しますと、「江戸から東京へ」という言い方もできます。それから「不連続性」という言いかたに注視しますと、「江戸と東京」という表現もまたあり得るかもしれません。テーマをそのように翻訳しながら、さらに考えを進めたいと思います。

**封建都市、近代都市とはなにか** まずこのテーマについて、私は、首都東京に「近代都市」の規定を与えることから出発したいと思います。

日本の歴史には古代とか中世、また近世、近代、現代などいくつかの時代の区分があります。日本の近代はどこから始まるかといえば、やはり、幕末開港の前後からそう規定することになりますし、そして明治の東京は、カッコをつけて「近代都市」と考えたい。

「近代都市」といえば、江戸を含めて、大阪も京都もそうなのです。そして幕藩制社会つまり江戸時代の都市をどう考えたらよいか。これもいろいろ言い方がありますが、ここでは「封建都市」というようにかつて言われてきた言葉を借用しました。そして「封建都市」や「近代都市」とは、一体どういう都市を言うかということ、まず確認するところから始めないと混線すると思っています。

まず「封建都市」ですが、これは「石高制」と、それから商品の生産・流通を基盤にした都市をいいます。「石高制」とは、米の収穫量を基準にした支配体系です。そして特に江戸時代の後半になり

ますと、その石高制の社会のなかで商品の生産や流通が広がります。大阪のような都市が全国市場の中心になりますが、そういう石高制と商品の生産・流通を基礎にした都市を封建都市と考えたい。

しかし私はこの表現に抵抗があり、一応ここでは私なりに「幕藩制都市」という言い方をしました。江戸時代の都市ということで、「幕藩制都市」あるいは「近世都市」という言い方に変えてみたわけです。

それに対して「近代都市」とはなにか。まず近代とは、まぎれもなく資本主義社会であるということです。そしてそういう資本主義社会が生み出した都市が、「近代都市」であると考えます。そうすると、資本主義の成立には企業や金融機関などによる資本の蓄積がどうしても必要です。資本の蓄積が一方にあって、同時に他方で、資本に雇われる労働者あるいは労働力が不可欠です。そういう資本と賃労働の関係を軸にした都市を、一応ここでは「近代都市」と考えたい。そして「幕藩制都市」の表現に調子を合わせて、「資本制都市」と言ってみました。

ここで結論らしいことを言わせて頂ければ、首都の東京には江戸とは異なって、資本主義の発展の筋道または論理というものが、この「近代都市」あるいは資本制都市にはあるのではないかと。そう考えながら、先の「連続と不連続」の問題になりますが、東京の都市形成史には、「連続」の側面があったとしても、それは「不連続」のなかに含まれる、つまりその一部であると考えた方がよいと私は思っています。

**近代都市東京の発足** そういうことを前提に、次に具体的な報告の内容に移りたい。レジュメの地図と統計をご覧頂きながら、お話を進めます。東京には江戸とは違って、資本主義の発展の筋道があり、それはやはり「不連続」の側面を、少なからずそのなかに含んでいる一つの論証として、レジュメの図と表を使いたいわけです。

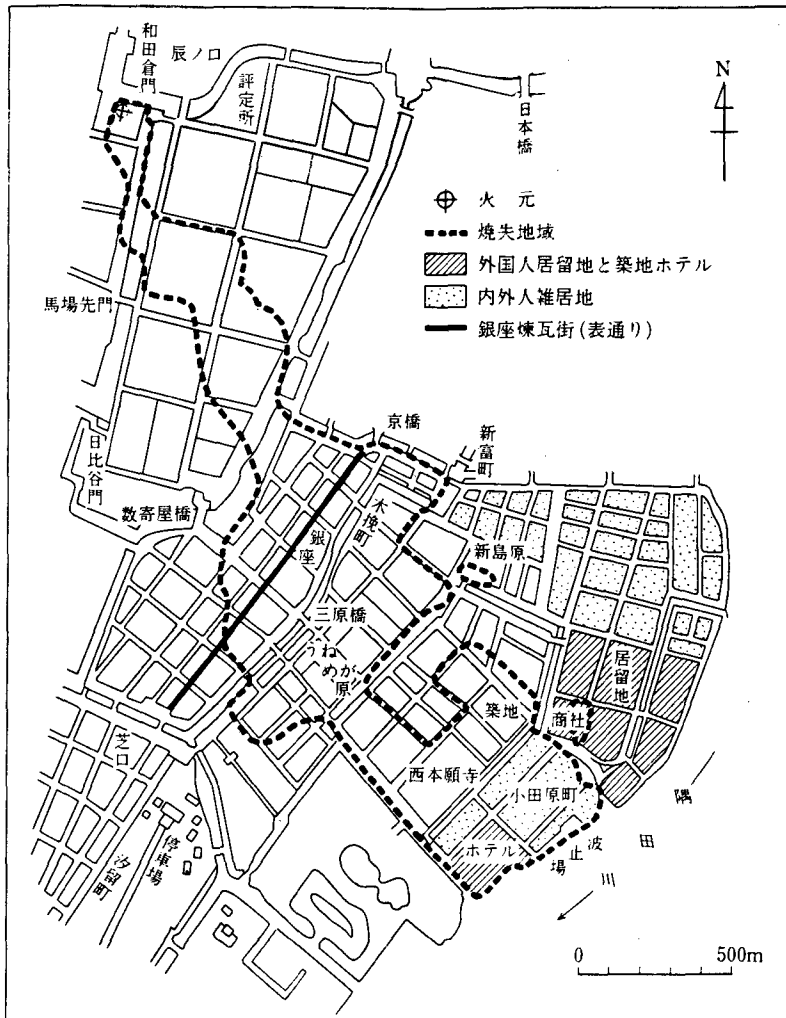
それを証明するためには、いろいろな例証が必要ですが、ここでは、一つだけ具体例を申します。まず明治維新直後の首都東京の動きを少々考えてみたい。幕末に日本は世界に向けて開港しました

結果、各地に開港場ができました。王政復古の時期に、東京にもそうした動きが見え、そして幕末には横浜が日本最大の生糸輸出港として登場します。関西では、神戸も横浜と並ぶ開港場になりました。さらに長崎ではすでに江戸時代を通じて、出島を窓口、居留地へ外国人が来て貿易をおこなっていました。そこでの外国人とはオランダ人であり、あるいは中国人でした。

こうして幕末の開港をきっかけに、開港場から欧米の文化が国内に流入してきます。例えば横浜

港から生糸・茶などを輸出しますが、逆に外国から、とくにイギリスからは多量の綿製品あるいは砂糖などが日本国内に輸入されます。

それと同時に、都市の市街地あるいは町並みにも、西欧化というかたちで文明開化の動きが見えてくる。そしてそれは横浜などにも出てきますし、それから幕末の江戸あるいは明治の東京にもそうした動きが現われますが、その具体例をまず東京で見ることにより、江戸から明治東京への「連続性と不連続性」の問題を考えてみたいと思います。



日本建築学会編「近代日本建築学発達史」(丸善, 1972年)所収の地図に加工。原図は1880年の実測図をもとに復元された。

図 1872年の東京(銀座・築地)の大火と居留地・雑居地

まずそれを示しているのが、この地図です。1872（明治5）年2月の東京の一部、つまり銀座、築地、新橋がここに見えます。まずそこで明治維新期に変化が現われるのが居留地で、外国人が滞在した築地居留地です。この一角で、明治初年に新しい文明開化のいぶきが見えます。この築地居留地は、最大の外国人居留地であった横浜のそれとは比較にならない小規模で、明治初期に滞在した外国人の数も十分の一程度でしたが、ここに、文明開化の象徴ともいえる居留地が形成されたことは注目してよいと思います。

築地居留地では、一区画が500～600坪に地割りされ、外国人にそれらの土地を貸与したのですが、そこに住み込んだ外国人は、アメリカやイギリス系の外国人が多かったのです。職業を見ても船員とか技師、教員、宣教師が多く商人は多くなかったのです。そういう点で、横浜とかなり違っていたのです。

築地居留地の一角に商社が見えますが、そこが今の聖路加病院に当たるところでした。それから外国人と日本人との雑居地や築地ホテルもあり、現在の魚河岸に当たります。ともかく、このように東京の一角が変化したわけです。

それから「汐留町」とか「停車場」も見えますが、それが新橋の停車場で、日本最初の鉄道が、こうして新橋から横浜まで開通しました。それで、横浜の外国人が鉄道で東京にやってくるということもありましたし、さらに新橋から馬車で銀座や築地などに行くことも容易にできるようになりました。

さらに、新橋の北の方には銀座煉瓦街が建設されました。その表通りを中心に、このあたり全体が銀座煉瓦街の建築の対象地域になりました。

それで、築地居留地と新橋停車場と銀座煉瓦街を結んだ地域、つまり三角地帯と考えてもよいのですが、ここが東京でもっとも早く文明開化の洗礼を受けた空間で、旧来の町並みが大きく変化していったといえます。

銀座煉瓦街についてはいくつかの研究があり、また考え方の対立もありますが、要するに、当時の大英帝国のロンドンの繁華街をモデルに、首都

東京の不燃都市化を実現しようとしたのです。そしてその建築が成功か失敗かは論議が分かれるところですが、この銀座煉瓦街が登場したことで、街の様相が一変したことは間違いない。このように考えますと、築地・新橋・銀座の一带は、東京の市街地のなかでも最も早く変った都市空間であったと私は思っています。このように市街地の一部の景観が変化することを、まず考えなければならぬと思います。

その後、1880年代後半から、現在の日比谷公園に当る日比谷練兵場の一角を中心に、中央官庁街の集中・建設計画が進行したことがありました。これは東京の街づくりでも突出した面白いプランで、ドイツ人の建築家でありましたエンデとベックマンという二人の専門家に設計を依頼し、完成すればかなり立派な官庁街が出来あがるはずでした。そうした官庁街の建設計画も、前述のように、明治国家が条約改正に備えて、欧米列強なみの先進国としての体裁を整えたいという緊急の目的があって、それに焦点を合わせた計画であり事業であったといえます。この計画は残念ながら、一部を除いてほとんど実現しないまま失敗に終わりましたけれども、そうしたことがあったことは確かです。

これから見ますと、明治維新後、首都東京の都市空間のなかには、その一部に文明開化というかたちでの景観の変化が現われたのではないか。「明治国家と文明開化」ということで、首都の東京を基盤に、全国を管理する都市空間、明治国家の管理のための都市空間、そして西欧化のための都市空間があわせて考えられます。そういう意味で、明治国家と文明開化のかたちで、管理と消費の都市空間が、東京の一角に現われてきたことに私は注目したい。

こういう点を見ますと、新しい東京ということで、江戸にはない動きを考えざるを得ず、つまり、「不連続性」をこの部分で強調するということになります。

しかしそれですべて私の説明が終わったわけではなく、「構造別による東京15区の家屋棟数」という統計をご覧願いたいのです。

表 構造別による東京15区の家屋棟数 (1879年)

区名	洋風または石造家屋			上・中級(普通)家屋				下級家屋					合計		
	煉瓦家	西洋造	石造	金属葺	ガラス葺	瓦葺	塗家	土蔵	こけら葺	萱・藁葺	杉皮葺	紙瓦葺		注(2)	注(3)
麴町		16		3	2	2,687	6	23	2,602	4	11		2,617	49	5,354
日本橋	7	11	9	42	2	6,302	206	566	10,147	1	21	4	10,173	59	17,315
神田		26	2	20	3	4,650	83	73	9,302		33	2	9,337	56	14,188
京橋	922	22	73	61		3,313	1,419	517	8,083		129	4	8,216	56	14,543
芝	2	8	5	7		5,154	21	20	6,338	158	56		6,552	56	11,769
麻布		2		1		1,364	3	16	1,979	515	46		2,540	65	3,926
赤坂				1		648	5		1,619	272	24		1,915	75	2,569
四谷				1		602	2	7	2,598	122	21		2,741	82	3,343
牛込				1		1,764	4	19	3,088	677			3,765	68	5,553
小石川		2		4		1,720	2	1	2,062	895	33		2,990	63	4,719
本郷		1				2,625	8	6	4,250	255	12		4,517	63	7,158
下谷	2		2	1		2,682	5	1	3,922	342	50	1	4,315	62	7,008
浅草	5			9	5	6,890	113	15	6,717	151	51		6,919	50	13,957
本所	3			10		5,753	4	13	3,489	199	103		3,791	40	9,472
深川		1				4,290	24	4	3,269	76			3,345	44	7,767
合計	941	89	91	161	12	50,444	1,905	1,281	69,465	3,667	590	11	73,733	57	128,641

注(1) 単位は棟数。

(2) 「下級家屋」のみの小計を示す。

(3) 合計に占める「下級家屋」の比率を示す。

(4) なお原史料では、合計の数字に一致しない部分があるが、そのまま記載した。

(5) 合計は、倉庫・物置・納屋・社寺などを除く。

(6) 「十五区家屋調査表」(『東京市史稿』市街編、第65巻)より作成。

同表中の「洋風または石造家屋」の京橋区について、煉瓦家922棟とあります。これは銀座煉瓦街の数字がここに含まれており、その数字を示すと思います。

それから「上・中級家屋」のなかの「金属葺」とは銅またはトタンの屋根でしょう。それからガラス葺とは、どういうものであったかわかりません。当時、板ガラスは輸入で大変高額であったはずですが、屋根などに使われたこともあったのでしょうか。それから瓦葺と塗家・土蔵のような家が、かなり東京の全域に広がっていたことがわかるはずです。

さらに問題は下級家屋です。「柿葺」とは「こけらぶき」をいうので、板を薄くそいで、瓦のように屋根をふいた薄板葺の屋根です。その次が藁葺・萱葺、杉皮葺、ついで紙瓦葺ですが、これはよくわかりません。多分、厚紙にうるしなどでも塗って瓦にしたのでしょう。

これでわかりますように、明治12(1879)年の段階では、東京の市街地の全域にわたって、かなりの割合で、板葺、薄板葺、柿葺、その他の家がひしめいていたこととなります。そして平均して、家屋の6割近くが下級家屋に属していました。とくにそのなかでも日本橋区のように市街地の中心でも59%、つまり6割近くが下級家屋でした。四谷区に至っては8割強がそうだったわけです。このように現在では想像ができないほど下級家屋のこけら葺や杉葺や、萱葺や藁葺などの家が、東京の全体に広がっていたことが考えられます。

こういう下級家屋の実態は、いわゆる「九尺二間の裏長屋」がそういうこけら葺の中心でした。9尺2間とは、つまり6畳1間です。しかしそれに土間や炊事場が含まれていたため、それを除くと4畳半1間です。当時は子供が多かったわけですから、一家族の人数が押し合いへし合い、住んでいたということなのです。



落語によく出てきますが、差配人つまり管理人の大家さんのもとに、八つぁんや熊さんが庶民生活をくり広げた、そういう空間です。

少し余談になりますが、現在の江東区に「深川江戸資料館」という施設がありまして、そこに、こうした長屋が復元されていますので、ご覧になると参考になります。

要するに、この表は、江戸以来、一部の市街地、例えば京橋区の銀座煉瓦街などを除き、ほとんど変化をしていない住民の都市空間があったことを示す一つの材料ではなかったかと思えます。つまり図は東京で早くから変化した都市空間、表は全体にわたり、ほとんど変化しなかった部分ということになるはずで

ところでそういう東京は、関東大震災までの期間に、基本的には江戸的な部分を残しながらも、徐々に変化していたのではないかと、都市空間のなかで人びとの生活の場で変化が現われてきていたのではないかとこのことを強調したい。

その変化を促進したのが「産業革命」であり、産業革命という経済と社会の変動を経て、日本全体も変わったのですが、東京の市街地の変化もさらに進んだと思えます。

産業革命の定義は省略しますが、要するに、この変化によって資本と労働力が生み出される、そして資本主義の発展の基礎が築かれるということです。大体1880年代末期あたりから、そうした動きが出てきて、東京に企業や金融機関が集中していきます。

そして「それ行け、東京へ」ということで、全国の農村から東京をめざして続々と人口が集中し始めます。明治初年で、江戸100万の人口が60万人ほどまで減少したのですが、その後また1890年代の初めにはもう150万か160万人まで増加しました。そしてその後も増加のテンポを緩めず、さらに300万、400万人というように急増していきます。こうして人口の流入・集中によって、首都東京が、現在のような一極集中への歩みを強めたとも言えると思えます。

それとともに、東京の市街地の全域にわたって、裏長屋に下層民が集まるようになった。そうした

人びとの大半はまだ労働者ではない、半失業者も含めて、零細な職人とか小商人とか大道芸人とか、いろいろな人たちがそこに押し合いへし合い住んでいた。そういう裏長屋のなかから、一部ですが、工場労働者になる、あるいはそこに雇われる動きが出てきます。つまり、労働者がまとまって、裏長屋のなかからしだいに分離・自立し始める動きが、産業革命を画期に現われ始めてきたと私は考えています。

つまり首都東京が江戸的な都市空間を残しながら、市街地のなかの生産関係、生産のしくみに質的な変化が現われてきつつあったのではないかと、私は産業革命のころからそのことを認めたいと思います。そう申しますのは、要するに近代の生産と労働の都市空間へと、東京の市街地が変わり始める転換期がそのころであったと、ここでいいたい。

つまり、私はその頃から、東京が「近代都市」に変わり始めてきたと考えたいのです。

そして、それは、1880年代の後半以降と思っています。歴史の変化というものは、ある時期以降一変するものではない。例えば、羊羹とかチーズを前に置いて、それを時間の流れにたとえたとして、ナイフなどで垂直に切ったとする、そしてそれを境いに、二つの部分が切り離される。つまりその例えのように、「封建都市」から「近代都市」に一挙に変わると考えないで頂きたい。そういうたとえを使えば、むしろ垂直切りではなくて斜めに切る、そうすると、ある部分が次第に減って、他の部分が少しずつ増えてくる、こういう比喻で恐縮ですが、そういうかたちで歴史は変わっていくと考えた方がよいと思えます。

「近代都市」への東京の転換期　そこで、それでは産業革命が始まった1880年代後半まで、明治維新からそれまでの首都東京はどういう都市であったかが問題の焦点になります。その点に関して、私は次の点を確認したい。

まず始めに、その時期に首都東京は、明治国家の中央集権的支配に対応するような都市に変わったと考えたい。私は、それを「国家の都市」という表現を使っていますが、つまりそれは国家権力

を組み立てていた官僚と軍隊によって守られている、そういう都市としての側面を東京はもっていた。そしてそれは、明治国家の課題であった富国強兵の政策にこたえようとした都市のあり方であったろうと考えています。

次に、すでに申しましたように、首都東京と港湾都市の横浜との関係に注目したい。首都東京は、その前身の江戸と切り離せないうえ、横浜港と深いかわりがあったと見られます。

その最大の理由として、横浜からの生糸の輸出あるいは外国品の流入は、横浜を經由して東京に輸送される。つまり、横浜は首都東京の外港の役割を果たしていた。そして横浜と東京は、時には対立したこともありましたが、やはり分業の関係にあった。一方の東京が政治都市で首都であれば、横浜は商業＝貿易都市として、両者が結合して一つの役割を果たしていたと考えられます。こういうしくみが、幕末の江戸から明治期にかけて進行していきます。

それから最後は、資本主義化のための政策の展開です。明治政府は、さまざまな方法で資本主義化のための政策を推進しました。富国強兵とか、殖産興業政策とかがそれです。そこでは、欧米列強から生産技術を取り入れて、それを日本に定着させ、そして政府主導型の官営事業を中心にして、資本主義化を達成していったわけです。このように産業革命に向けて始動したその時期が、明治維新からはほぼ20年間であったと思われる。そうですから、近代都市と言っても、実態は近代都市へ移行するための過程であったと言ってもよいかもしれません。そういう時期として、この頃を見たい。

まとめにかえて 私の都市史研究の方法は、都市をバラバラに分けないで、全体をまとめて見る、構造的に段階的に重層的に、東京に迫ってみたいというわけです。江戸や東京の研究はこれ迄にもあり、それらのなかには面白い都市論も少くありませんが、私の都市論は「辛口」の都市論とでも申しませうか。お酒には甘口も辛口もありますが、甘口の花見酒よりも辛口の方をお好きの方もいるかもしれないと思っています。以上、まとま

りの悪いお話をしましたが、一応、これで失礼します。

#### 4. 閉会あいさつ

石田 吉原先生、石塚先生どうもありがとうございました。

私は大学で都市研究センターの所長と同時に公開講座委員会の委員長という役割もしております。今日の催しも公開講座委員会の企画の一環でやっているわけですが、一方東京都立大学では今年からは財団法人都民カレッジという組織を外郭につくって、「都民カレッジ」という一般市民向けの講座をやっております。その財団法人都民カレッジでは、一般市民向けの非常にたくさんの講座を起こしてしまっていて、そこにも「東京学」というのがありまして、石塚先生にはそちらの方でもお話いただいているわけです。

今年の公開講座委員会の最初のころに、都民カレッジと大学が主催する公開講座とどういう関係におくのかということについて議論になりました。あるいは今日お集まりの方にも、都民カレッジで講義を聞いていただいている方もおいでかと思いますが、公開講座委員会では、いわば大学が主催する公開講座の方は、大学としての最新の研究成果を市民に訴える、そういう性格をもたせたいと考えています。

先ほど石塚先生から辛口のお話がありましたけれども、今日取りあげた問題は、学問的にも非常に議論があるところです。そういう意味で今日は市民向けということで少し柔らかくお話いただいたのですが、このテーマは都市研究センターを中心に我々が研究してきた成果の一端を、学外者である吉原先生をお招きして、少しぶっつけ合ってみた、そういう催しでもあったわけです。そういう意味で少し難しい面もあったかもしれませんが、皆様方のこの問題をもう少し勉強してみたいという関心をかきたてることができたのであれば、主催者側として大変よかったのではないかと考えております。

今日はどうぞご清聴ありがとうございました。